

長良川河口堰の在り方考える

本格運用30年 岐阜でシンポ



計画当初から賛否を呼んだ長良川河口堰（三重県桑名市）の本格運用から30年を迎えた6日、今後の在り方を考えるシンポジウムが岐阜県図書館（岐阜市）であり、建設に携わった元官僚や大学教授らがそれぞれの立場から提言した。

長良川河口堰は河口から5・4キロ上流にある可動式堰。生態系などに悪影響があるとしてゲートの開門を求める声がある一方、堰を管理する水資源機構側は塩

長良川河口堰の今後の在り方について意見を交わす登壇者ら＝岐阜市宇佐の県図書館で

害が生じる恐れを理由に「適切でない」としている。

登壇した国土交通省の元官僚で長良川河口堰建設事務所長だった宮本博司さんは、論争を起こした要因は「結論ありき」の姿勢だと指摘。「双方がいくら議論してもかみ合うわけがない」と振り返り、「必要なのは結論を決めないこと。柔軟性があれば、住民と行政の信頼関係はでき、本当の議論ができる」と訴えた。

主催した市民団体「よみがえれ長良川実行委員会」によると、機構側にもシンポジウムへの参加を呼びかけたが「日程が合わない」

との返答だった。岐阜協立大の森誠一教授は「今こそ円卓会議が必要だ」と語り、東京大大学院の蔵治光一郎教授は「対立から未来は生まれない」と述べた。

シンポジウムには約200人が参加。常時開門に踏み切った韓国の河口堰も紹介された。

（稲垣達成）